

中国における少数民族研究の近況

著者	谷口 房男
著者別名	TANIGUCHI Fusao
雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	18
ページ	25-33
発行年	1983
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010219/

中国における少数民族研究の近況

——とくに西南民族に関する出版物を通して——

谷 口 房 男

はじめに

私はこのところ中国の少数民族の歴史、とりわけ西南中国の少数民族の歴史について関心を抱き取組んできている。そうした成果の一端として、この春に本研究所の研究叢刊第一・『明代西南民族史料——明実録抄——』（第一冊）を出版した。この史料集は、明代史の根本史料である『明実録』の中から、西南民族に関する記事を抽出して抄録したものである。その序文において本史料集を出版しようとした主旨を次のように記しておいた。

今日の中国は、漢民族をはじめとして、多数の（少数・非漢）民族によって構成されるところの多民族国家である。多民族国家としての中国が歴史的に形成されたものである以上、中国の文明や歴史は、これら諸民族との関わりの中で追求する必要がある。従来、北方諸民族については、その文化や歴史、また彼らが中国史に果たした役割などに關して、様々な角度から検討がなされており、その歴史史料の収集・整理も行われ、幾多の業績をみるに至っている。一方、西南民族については、近年になって、その理解を深めるための図録や解説書、さら

中国における少数民族研究の近況

に民族学的方面からの現地調査報告書などが、多く刊行されるようになってきている。しかし、西南民族に関する歴史史料の収集・整理については、殆んど行われていない状況である。こうした現状に鑑み、西南諸民族に関する記事を豊富に収めているところの『明実録』の中から、その關係記事を抄出してみようを試みた。

以上の如く、中国における民族研究の現状を簡単にふれた上で、本史料集刊行の意義をのべたのである。

ところで、一九六六年からはじまったプロレタリア文化大革命は、一九七六年の毛沢東の死と、それに引継ぐ四人組の失脚とともに完全に終息した。そしてその後、中国においては、急速に大量の出版物が刊行されるようになってきた。そのような状況の中にあつて、特に少数民族に関する出版物の量は驚くほど庞大である。このことは中国における民族研究の活況を示すものではなからうか。

そこで、最近の中国における民族研究、とりわけ西南民族研究の現状について、出版物を通して概観してみたいと思う。

本論に先だって、参考のために中国における少数民族の概況について簡単に紹介しておきたい。

一、中国少数民族の現状

(a) 少数民族の名称

今日、中国には漢民族をはじめとして、五十五の少数民族を加えた五十六の民族がいるといわれている。それらの名称については、第一表を参照していただきたい。

ところで、今日では中国の少数民族は五十五となっているが、これはあくまでも政府が公認した民族の数であって、解放後もない一九五一年ごろには六十以上の民族といていた時期もある（劉格平「兩年来的民族工作」〔『民族政策文件彙編』第一編・五三頁〕）。その後、これらの民族集団が検討・整理されて五十五となっているのである。一方、中国には今日なお民族として認定されることを要求している民族集団が多くいるといわれている。そのような未公認の民族集団を〇〇人と呼んで、民族と認定された〇〇族と区別している。例えば、雲南やチベットにいる空格人・苦聰人・布下人・僮人などはその一部である。

(b) 少数民族の人口

一九四九年に新中国が誕生してから今日までに、中国において三回（一九五三年、一九六四年、一九八二年）の人口調査が実施された。最近行なわれた人口調査は一九八二年であり、それによると中国の総人口は第二表の如く、大陸のみで十億八一八万人となっている。そのうち、漢民族が九

億三六七〇万人で、全体の九三・三パーセントを占め、少数民族が六七二万人で、六・七パーセントとなっている。なお各少数民族の人口は、第一表に示されているのでそれを参照していただきたい。

第一表によれば、人口一〇〇万人を超える少数民族は一五民族となっている。その中でも最も人口の多いところの広西チワン族自治区に主に集居しているチワン（壮）族は、一三三七万人となっている。ちなみに、ヨーロッパにおける西ドイツの人口が一六〇〇万人であり、オランダの人口が一四〇〇万人である。チワン族はまさにそれらに匹敵するほどの人口を擁している少数民族である。一方、ホジェン（赫哲）族のように僅か一五〇〇人とか、ロッパ（珞巴）族の二〇〇〇人といった極めて少数の民族もいるのである。

ここで中国の人口との関係で一言つけ加えれば、今日の中国では人口抑制政策が実施されており、一夫婦一人児政策が推進されている。ところが、従来この政策は少数民族に対して適用されないといわれてきたが、最近の文献によれば、少数民族が一律に適用外にあるのではなく、人口の少ない民族のみが抑制策の対象から除外されているようである。（若林敬子編集・解説『中国の人口問題』（現代のエスプリ）No. 190）

(c) 少数民族の分布

中国における少数民族の居住地域は、国土全体の五〇ないし六〇パーセントといわれている。すなわち、国土の半分以上が少数民族の居住地域ということである。ただし少数民族の散居および漢民族との雑居地域を含めるとさらに遡大となるであろう。少数民族の居住地域は、面積の広大なの

に比して可耕地が少なく、山岳地帯や砂漠地帯が多いということである。しかしながら少数民族居住地域は鉱産物資源をはじめとして、天然資源が豊富な極めて重要な地域である。

第一表の各民族の主要居住地域からもわかる如く、少数民族の居住地域は、その多くが外国と国境を接する地域であり、いわゆる中国における辺疆地域であることができる。たまたま中国とソ連、中国とベトナムといったように、国境を接してそれぞれの国家が存在し、そこには国境をはさんで同一民族が二分されているケースがしばしばみられる。例えば、モンゴル民族の如くである。すなわち、外モンゴルと呼ばれるモンゴル人民共和国と中国領内における内蒙古自治区は、いづれもモンゴル民族の集居地域である。中国領内の少数民族とその周辺国家内の少数民族が同一民族でありながらも別々の国家にいたのである。このような状況から、相互の交流が平常時には比較的自由である。一方、国家間の対立が民族間の対立を生む契機にもなりかねないのであり、その逆の現象もありうるのである。それ故に中国における少数民族問題は、時に辺疆問題・国際問題に発展する要素を内包しているのである。

二、中国における民族研究の推移

先に指摘した如く、今日の中国は大民族としての漢民族をはじめ、五十の少数民族とから構成された多民族国家である。このような中国について、その歴史や文化を理解する上で、とりわけ漢民族中心の中国研究に対する反省に立つとき、少数民族に関する研究は極めて重要な作業の一つであるといえよう。そこで、中国における（少数・非漢）民族研究の動向に

ついて、とくにその成果の一端としての出版状況からみていきたい。中国における（少数・非漢）民族研究は、主として歴史学と民族学の二つの分野から進められてきた。その推移をとりあえず便宜的に次の四つの時期に分けてみていくこととしたい。

第一期は一九二〇年代後半から一九四九年の解放まで、第二期は一九四九年の新中国の誕生から一九六六年のプロレタリア文化大革命の始まるまで、第三期は一九六六年の文革開始から一九七六年の四人組失脚まで、第四期は一九七六年の文革終息から今日までの四時期である。

そこで、この四つの時期の民族研究の動向について、主として出版物を通して紹介してみたい。但し、ここではとくに私の問題関心との係りから、少数民族の言語・文字や文学に関する著作については必要最少限にとどめ、あくまでも歴史学・民族学に関するものに限定してみたいと思う。

第一期は、のちに北京大学校長となった蔡元培らをはじめとするヨーロッパ留学から帰国した人々によって、中国にヨーロッパの科学的な民族学（文化人類学）研究を紹介し推進していった、いわゆる民族学研究の揺籃期ともいふべき時期である。この時期の代表的な著作は、王桐齡『中国民族史』（北平文化学社・一九二八）、張其昀『中国民族志』（商務印書館・一九二八）、呂思勉『中国民族史』（世界書局・一九三四）、宋文炳『中国民族史』（中華書局・一九三五）、林惠祥『中国民族史』二冊（商務印書館・一九三六）、劉師培『中国民族志』（寧武南氏劉申叔先生遺書所収・一九三六）、呂振羽『中国民族簡史』（重慶光華出版社・一九四八）などである。このような概括的な中国民族史（志）に関する著作は、解放後には殆んどみられないものである。一方、各民族の歴史に関する文献による研究や野

外調査が進められ、その成果は数々みられるが、ここにとくに西南民族に関する主なものを列挙すれば次の如くである。

周希武『玉樹土司調査記』（商務印書館・一九二〇）、楊成志『雲南民族調査報告』（中山大学語言歴史研究所・一九三〇）、顔復礼・商承祖『広西凌雲猿人調査報告』（中央研究院社会科学研究所・一九三二）、劉錫蕃『嶺表紀蛮』（商務印書館・一九三四）、龐新民『阿広猿山調査』（中華書局・一九三五）、江応樑『西南辺疆民族論叢』（広州珠海大学・一九三八）、曾昭掄『大凉山夷区考查記』（昆明求真出版社・一九四五）、林耀華『凉山夷家』（商務印書館・一九四七）などである。

第二期は、一九四九年の中国共産党による中国解放と中華人民共和国の誕生によって、多民族国家としての新中国がスタートし、その構成員である多くの少数民族に対して社会・経済の発展を促進するために、少数民族の幹部の養成および民族研究を奨励した時期である。こうした政策の具体化の一つが、北京に中央民族学院を、各地の少数民族集居地域に地方民族学院を設置したことである。いま各地に設置された民族学院とその設置年次、設置場所について示してみれば、次の通りである（『中国百科年鑑・一九八〇年』による）。

中央民族学院	北京市	一九五一・六
西北民族学院	甘肅省蘭州市	一九五〇・八
貴州民族学院	貴州省貴陽市	一九五一・五
西南民族学院	四川省成都市	一九五一・六
中南民族学院	湖北省武漢市	一九五一・八
雲南民族学院	雲南省昆明市	一九五一・八

広西民族学院 広西チワン族自治区南寧市 一九五二・三

青海民族学院 青海省西寧市 一九五六・九

広東民族学院 広東省広州市 一九五八・九

西蔵民族学院 陝西省咸陽市 一九六五・七

（なお貴州民族学院は一九五九年に貴州大学に合併され、一九七七年に復活。中南民族学院も一九五七年七月に中央民族学院分院と改められた。）

この時期における中国共産党の民族政策の推進は、民族研究においても大きな発展を促すこととなった。その際に、新中国が誕生した当初は、まずソビエトにおける民族研究の理論や方法を導入することに努めた。そのあらわれは、一九五四年より刊行された民族問題訳義編輯委員会編による『民族問題訳義』（民族出版社）であり、一九五八年八月までに第三〇期（号）を発刊した。それに代って、学術誌としての『民族研究』や政治宣伝誌としての『民族団結』『民族画報』などの定期刊行物が刊行された。一方、僅少ではあるが専門的な著作もいくつかみられる。とくに西南少数民族に関するものに限ってみれば、馬少僑『清代苗民起義』（湖北人民出版社・一九五六）、黄現璠『広西僮族簡史』（広西人民出版社・一九五七）、雲南人民出版社『雲南白族の起源和形成論文集』（雲南人民出版社・一九五七）、黄蔵蘇『広西僮族歴史和現状』（民族出版社・一九五八）、江応樑『明代雲南境内の土官与土司』（雲南人民出版社・一九五八）、方国瑜『元代雲南行省傣族史料編年』（雲南人民出版社・一九五八）、李家瑞等『大理白族自治州歴史文物調査資料』（雲南人民出版社・一九五八）、謝華『湘西土司輯略』（中華書局・一九五九）、馬長寿『南詔国内的部族組成和奴隸制度』（上海人民出版社・一九六一）などであり、これらはこの時期に出版

された代表的な著作である。

第三期はプロレタリア文化大革命の期間であり、民族研究のみならず、中国におけるあらゆる学術研究が停滞あるいは中断した時期である。とりわけ、解放後に各地で進められていた民族調査とその整理・検討も中断されたのである。なおこの時期には、国防を重視し、少数民族を軽視するといった政策が採られ、民族研究に関する出版物なども、政治的な宣伝を目的とする若干のものを除けば、殆んどみるべきものがないといってもよい状況であった。

第四期は、約一〇年間のプロレタリア文化大革命期の空白を埋めるかの如く、一挙に大量の出版物が刊行されるようになってきた一九七六年後半から今日までである。ところで、このような状況に対して考えさせられることとして、これだけ大量の出版物が一挙に堰を切って流れるが如く刊行されるようになってきたということは、当然といえば当然のことながら、文革前のみならず文革中にも研究がなんらかの形で継続されていたであろうことを推測させるものである。

この第四期の出版物を通してみた研究動向については、節を改めてみていくこととしたい。

三、最近の中国における

出版物を通してみる民族研究の動向

まず、定期刊行物としては、文革中に一時停刊されていた『民族研究』・『民族団結』・『民族画報』が、逸早く復刊されたばかりでなく、一九八一年からは『民族学研究』が創刊され、さらに『民族文化』といった専

門雑誌も刊行されるようになった。このような民族(学)研究に関する専門雑誌のみならず、『歴史研究』・『中国史研究』といった学術雑誌をはじめとして、各地の総合大学や民族学院の紀要・報告書の類にも民族研究の論文が多く掲載されるようになり、それらの一部が複印報刊資料『中国少数民族』に収められ、利用するのに極めて便利となった。なおこの資料集には我国に入荷されていない大学の各種の紀要類や各地の新聞・雑誌からも収録されており、とりわけ内部出版物からの転載もあって、至便なものであったが、一九八三年より停刊されることとなった。

民族研究の基本的な工具である民族地図や年表・辞典もここにきて各種の出版物が刊行された。その中で特筆すべきものとしては、国家民族委民族問題五種叢書編輯委員会《中国少数民族》(編写組編『中国少数民族』)(B5・五九六頁、人民出版社・一九八一)の刊行であろう。本書は従来の少数民族民族研究の成果をふまえ、中国の少数民族の現状を最も手際よくまとめた、いわゆるハンド・ブックともいうべきものである。その内容は、中国の五十五の少数民族について、地域別にまとめて、それぞれの呼称・人口・居住地域・歴史・社会経済状況などについて詳説し、民族衣装をまとめた各民族の写真をまじえたものであり、中国の少数民族について知ろうとする者にとって、最も手頃な案内書・概説書ということができよう。こうしたハンド・ブックの他に民族辞典が刊行されている。その一つが、辞海編輯委員会『辞海・民族分冊』(A5・二二九頁、上海辞書出版社・一九八二)である。本書の内容は、まず民族問題・民族政策・民族学に関する用語を解説し、ついで中国の歴史上の民族に関する語彙を地域別にまとめて解説し、さらに中国の少数民族の言語・文字についてふれ、最後に世界各

第一表 中国少数民族の人口と居住地域

少数民族	民族数	民族名	人口調査		比率	主要居住地域
			(1982年)	(1964)		
蒙古族	Mongolian (Mongolian)	モンゴル かい	3,411,657	1,965,766	73.55	内蒙古, 遼寧, 新疆, 吉林, 黒竜江, 青海, 河北, 河南
回族	Hui (Hui)	チベット ウイグル ミャオ	7,219,352	4,473,147	61.39	寧夏, 甘肅, 河南, 新疆, 青海, 雲南, 河北, 山東, 安徽, 遼寧, 北京, 内蒙古, 黒竜江, 天津, 吉林, 陝西
藏族	Tibetan (Tibetan)	チベット	3,870,068	2,501,174	54.73	西藏, 四川, 青海, 甘肅, 雲南
維吾爾族	Uygur (Uighur)	ウイグル	5,967,112	3,996,311	49.07	新疆
苗族	Miao (Miao)	ミャオ	5,030,897	2,782,088	80.83	貴州, 雲南, 湖南, 広西, 四川, 広東, 湖北
彝族	Yi (Yi)	イ	5,453,448	3,380,960	61.30	四川, 雲南, 貴州, 広西
壮族	Zhuang (Chuang)	チワン	13,378,162	8,386,140	59.53	広西, 雲南, 広東, 貴州
布依族	Bouyei (Puyi)	ブイ	2,120,469	1,348,055	57.30	貴州
朝鮮族	Korean (Korean)	ちょうせん	1,763,870	1,339,569	31.67	吉林, 黒竜江, 遼寧, 内蒙古
滿族	Manchu (Manchu)	マン	4,299,159	2,695,675	59.48	遼寧, 黒竜江, 吉林, 河北, 北京, 内蒙古
侗族	Dong (Tung)	トン	1,425,100	836,123	70.44	貴州, 湖南, 雲南, 広西, 貴州
瑤族	Yao (Yao)	ヤオ	1,402,676	857,265	63.62	広西, 湖南, 雲南, 広西, 貴州
白族	Bai (Pai)	ペー	1,131,124	706,623	60.07	雲南
土家族	Tujia (Tuchia)	トウチヤ	2,832,743	524,755	439.82	湖南, 湖北, 四川
哈尼族	Hani (Hani)	ハニ	1,058,836	628,727	68.41	雲南
哈薩克族	Kazakh (Kazakh)	カザフ	907,582	491,637	84.60	新疆, 甘肅, 青海
傣族	Dai (Tai)	タイ	839,797	535,389	56.86	雲南
黎族	Li (Li)	リー	817,562	438,813	86.31	広東
佤族	Lisu (Lisu)	リス	480,960	270,628	77.72	雲南, 四川
傈僳族	Ya (Wa)	ワ	298,591	200,272	49.09	雲南
畲族	She (Sheh)	シヨオ	368,832	234,167	57.51	福建, 浙江, 江西, 広東
高山族	Gaoshan (Kaoshan)	こうざん	1,549	366	323.22	台湾, 福建
拉祜族	Lahu (Lahu)	ラフ	304,174	191,241	59.05	雲南
水族	Shui (Shui)	スイ	286,487	156,099	83.53	貴州, 広西
東鄉族	Dongxiang (Tunghsiang)	トンシヤン	279,397	147,443	89.49	甘肅, 新疆
納西族	Naxi (Naxi)	ナシ	245,154	156,796	56.35	雲南, 四川
景頗族	Jingpo (Chingpo)	チンポー	93,008	57,762	61.02	雲南
柯尔克孜族	Kergez (Khalkhas)	キルギス	113,999	70,151	62.51	新疆, 黒竜江

土 族	Tu (Tu)	トゥー	159,426	77,349	106.11	青海, 甘肅
達斡爾族	Daur (Tahur)	ダフール	94,014	63,394	48.30	內蒙古, 黑龍江, 新疆
佤族	Mulao (Mulao)	ムーラオ	90,426	52,819	71.20	広西
羌族	Qiang (Chiang)	チヤン	102,768	49,105	109.28	四川
布依族	Bulang (Pulang)	ブーラン	58,476	39,411	48.37	雲南
撒拉族	Sala (Sala)	サラール	69,102	34,664	99.35	青海, 甘肅
毛難族	Maonan (Maonan)	マオナン	38,135	22,382	70.38	広西
仡佬族	Gelao (Kelao)	ゴーラオ	53,802	26,852	100.36	貴州, 広西
錫伯族	Xibo (Sibo)	シボ	83,629	33,438	150.10	新疆, 遼寧, 吉林
阿昌族	Achang (Achang)	アチャン	20,441	12,032	69.89	雲南
普米族	Pumi (Pumi)	プミ	24,237	14,298	69.51	雲南
塔吉克族	Tajik (Tajik)	タジク	26,503	16,236	63.24	新疆
怒族	Nu (Nu)	ヌー	23,166	15,047	53.96	雲南
烏孜別克族	Usbek (Uzbek)	ウズベク	12,453	7,717	61.37	新疆
俄羅斯族	Russian (Russian)	オロス	2,935	1,326	121.34	新疆
鄂溫克族	Ewenki (Owenk)	エヴェンキ	19,343	9,681	99.80	內蒙古, 黑龍江
崩克族	Benglong (Penglung)	バングラン	12,295	7,261	69.33	雲南
保安族	Baoan (Paoan)	ボウナン	9,027	5,125	76.14	甘肅
裕固族	Yugur (Yuku)	ユーグ	10,569	5,717	84.87	甘肅
京族	Jing (Ching)	キン	11,995	4,293	179.41	広西
塔塔尔族	Tartar (Tartar)	タタル	4,127	2,294	79.90	新疆
独龙族	Dulong (Tulung)	トールン	4,682	3,090	51.52	雲南
鄂倫春族	Orogen (Olunchun)	オロチョン	4,132	2,709	52.53	內蒙古, 黑龍江
赫哲族	Hezhe (Hoche)	ホジエン	1,476	718	105.57	黑龍江
門巴族	Menba (Monba)	メンパ	6,248	3,809	64.03	西藏
珞巴族	Luoba (Loba)	ロツパ	2,065	—	—	西藏
基諾族	Jino	ジノ	11,974	—	—	雲南

〈民族名の欧文表記は Fei Hsiao Tung (費孝通) “Toward a People's Anthropology” 113~116p. による。
人口と居住地域は『中国統計年鑑』 1983, 39・113・114頁参照。〉

地の民族について地域別に解説しており、極めて簡便な民族辞典である。

最近のとくに際立った出版物としては、各民族の歴史や言語に関する叢書の類である。例えば『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊』『中国少数民族簡志叢書』『中国少数民族語言簡志叢書』などであり、これらの各叢書が陸續として刊行されている。この他にも中国少数民族地方自治概況を伝える叢書が刊行される予定になっているという。このような一連の叢書は、国家民族事務委員会に『民族問題五種叢書』編輯委員会を設置して取組んできた国家的事業の一部である。

ところで、中国においても一九七九年に全国的な規模での中国民族学研究会が設立された。また中国社会科学学院のもとに民族研究所が設置され、さらに各地の民族学院などにも民族研究所が付置されており、そこでの研究の成果が相次いで出版されている。その状況は本文末に付したリストを参照していただきたい。

なお個々の著作についての紹介は数幅の関係で省略したい。

おわりに

一九七六年の文革終息以後、中国において（少数）民族研究に関する著作が多く刊行されてきたが、そうした著作を通して最近の民族研究の傾向について二点ほど指摘してみたい。

その第一点は、従来研究者の殆んどは漢族出身者であったが、今日少数民族出身の研究者が養成されて成長し、少数民族自身の手で自からの民族研究を行うようになってきているということである。例えば、著書や論文の執筆者の後に（〇〇族）と記し、その出身民族名を示しているのである。

これは中央および各地に設置された民族学院や民族研究所において養成された少数民族出身の研究者が成長し輩出してきていることのあらわれであろう。

第二点は、中国における古典文献中の（少数）民族に関する記事の殆んどは、漢民族の体制側からの史料が中心であったが、しかし最近刊行されているものの中には、少数民族の側からの史料を、彼らの言語や文字を用いたり、あるいは漢訳して出版されるようになってきたことである。

このような新しい傾向は、民族研究にとって好ましいことであると同時に歓迎すべきことである。ともあれ、最近の中国における民族研究に関する出版の盛況は、中国における民族研究者の量の拡大と研究の質の高まりを示すものであるといえよう。

（本稿は六月一日に当研究所の研究例会で行った報告原稿を加筆したものである。）

《一九七六年以後西南民族関係出版圖書》
（辞典）

第二表 歴代人口統計

（単位：万人）

年次	1953		1964		1982	
	人	%	人	%	人	%
全国総計	60,193	—	72,307	—	103,188	—
大陸人口	58,060	—	69,458	—	100,817	—
男	30,082	51.8	35,652	51.3	51,943	51.5
女	27,978	48.2	33,806	48.7	48,874	48.5
漢民族	54,528	93.9	65,457	94.5	93,670	93.3
少数民族	3,532	6.1	4,001	5.8	6,723	6.7

『中国百科年鑑』1983, 662頁による

方国瑜『纳西象形文字谱』（云南人民出版社・一九八二）

（史料集）

蒙默『凉山地区古代民族资料汇编』（四川人民出版社・一九七八）

杜玉亭『元代纳西史料辑考』（四川人民出版社・一九七九）

江应樑『百夷伝校注』（云南人民出版社・一九八〇）

贵州民族研究所『西南地区彝文翻译组《西南彝志选》』（贵州人民出版社・一九八二）

广西民族研究所『广西少数民族地区石刻碑文集』（广西人民出版社・一九八二）

（民族紹介）

『今日的广西少数民族』（广西人民出版社・一九七八）

贵州民族研究所『贵州的少数民族』（贵州人民出版社・一九八〇）

云南历史研究所『云南少数民族』（云南人民出版社・一九八〇）

广东民族研究所『广东少数民族』（广东人民出版社・一九八二）

四川民族研究所『四川少数民族』（四川民族出版社・一九八二）

《思想战线》编辑部『西南少数民族风俗志』（中国民间文艺出版社・一九八二）

（民族史論文集）

馬曜『云南各族古代史略初稿』（云南人民出版社・一九七七）

贵州大学历史系『清代贵州各族人民的五次起义』（贵州人民出版社・一九七八）

尤中『中国西南的古代民族』（云南人民出版社・一九七九）

贵州省哲学社会科学研究所『夜郎考（一）（二）』（贵州人民出版社・一九七九・八三）

劉堯漢『彝族社会历史调查研究文集』（民族出版社・一九八〇）

詹承緒等『永寧纳西族的阿注婚姻和母系家族』（上海人民出版社・一九八〇）

宋恩常『云南少数民族社会调查研究（上・下）』（云南人民出版社・一九八〇）

田繼周・羅之基『西盟佤族社会形態』（云南人民出版社・一九八〇）

胡慶鈞『明清彝族社会史論叢』（上海人民出版社・一九八一）

P・Φ・伊茨著、馮思剛訳『東亞南部民族史』（四川民族出版社・一九八一）

百越民族研究会『百越民族史論集』（社会科学出版社・一九八二）

尤中『西南民族史論集』（云南民族出版社・一九八二）

嚴汝嫻・宋兆麟『永寧纳西族的母系制』（云南人民出版社・一九八三）